

第二節 音声の生活

特異な音節

室町時代には、「セ」音が「シェ」、「ゼ」音が「ジェ」と発音されていたという。安芸地方では、東隣の東広島市西条町の老人などで、この発音を聞くこともあるが、熊野町では、もはや聞かれなくなっている。

安芸北部地方で用いられている、「マ^ンダ」（まだ）、「カ^ンゴ」（籠）のような、「ン」音の入った発音も聞かれない。この発音も室町時代から存立していたという。熊野町には、古い時代からの発音を伝えていていることではないようである。その点では、熊野町の方言は、安芸南部地方の方言状況と同様に、新しさの認められる方言であるといつてよからう。

連語上の音変化

語と語とが連なると、音が変わることがある。このような場合の音声の変化を、次にとりあげてみる。

(ア) 「ゝのは」「ゝとは」

・ 「ゝのは」 √ 「ゝナー」

○ イク^ナー キライ^ジャ。(行くのはきらいだ。 少男↓々)

・ 「ゝとは」 √ 「ゝター」

○ ア^ツチ^ター コレ^ノ ホー^ニ ヨ^ケー ア^ロー オモ^ウン^ジャガ ノー。(あちらよりは、こちらの方に、よ

けいあるだろうと思うのだがねえ。 中男↓老男)

これらの助詞は、音変化の結果、一語の助詞のような形となっている。このような音変化は、安芸一帯の事象と等しい。なかで、「ゝター」は、事物の比較の基準を表わす助詞として、当地方特有の表現法に用いられるものといつてよいものである。

(イ) 他の語に接する「ゝは」

「ゝナー」「ゝター」は、「ノ」や「ト」の「o」母音に、「ゝは」という助詞が接して成立したものである。このように、「ゝは」は、前の語末の母音と熟合した形となることが多い。

・ a + は √ゝアー カワー（河は）

・ o + は √ゝアー カダー（角は）

・ u + は √ゝアー キカー（菊は）

これらは、すべて、「アー」と伸ばされて発音されているものである。

・ i + は √ゝチャー カキチャー（柿は）

・ e + は √ゝチャー フデチャー（筆は）

「i」「e」に「ゝは」が接すると、このように拗音（ようおん）に発音される。「手」「胃」のように短いことばの場合にも、「チャー」「イチャー」のように発音されている。拗音化傾向は、強いわけである。このような拗音化傾向の強さは、安芸地方の一般的傾向である。

(ウ) 他の語に接する「ゝを」の場合

対象を指示する「ゝを」が、他の語と接した場合、前接する語末が「a」「o」「u」であれば、前接する語末の母音をそのまま伸ばして発音する。

- ・カタ₁ター(肩を) ・キク₁ー(菊を)
- ・ココ₁ロー(心を)

ところが、「i」「e」の場合には、拗音となる。

- ・トナ₁リュー(隣を)
- ・カキ₁ニョー(垣根を)

なかでも、「i」母音に接した場合には、ウ段の拗母音となるという特徴が見られる。

- チュー スイタ。(血を抜いた。 中女)

- キュー ツコーチャ₁ー ワカラン デ。(気をつかっては、だめだよ。 中男↓々)

これらの「チュー」「キュー」は、いずれも短い語形のことばであるが、これらでも、拗母音化している。

「手を」の場合、広島市内では「tɔ:」と発音されることが多いが、熊野町では「tɔ:」と発音される。これを仮名符号で示せば、前者は「チョー」であり、後者は「テォー」となる。二つの発音を比べると、前者の発音のほうが、熟合度が高いものである。熊野町の発音は、なお「e + o」の発音が接合したときの状況、すなわちより古い状況を残しているといえようか。

(E) 「デス」「マス」に接する「ワイ」の変化

「デス」に、文末の助詞「ワイ」が接すると、「デサー」のようになる。「マス」の場合は、「マサー」となる。

- ワシガ イキマ₁サー ノー。(私が行きますわいねえ。 中男↓々)

「デサー」「マサー」は、現在、四〇歳以上の人々にもみ用いられている。青年層の人々からは、古態と評されているものである。

なお、安芸郡下の島嶼部では、「ンワイ」が「ンナー」となった形も時に用いられているが、熊野町では聞かれない。

(オ) 「ンチョル」「ンチャル」と「ンチャゲル」「ンチョク」

「ンチョル」というのは、動作の継続態を示す語である。このことからすれば、文法上の項目ということもできよう。「ンチョル」の成立過程を考えてみると、「ンテ オル」である。そこで、音声項目で取り上げてみる。

○アンコイ キニョーカラ ハー キチョンサロー ガー。(あそこに昨日から、もう来ていなさるじやないの。)

中女↓中男)

「ンチョル」は、広島市などでは直音化した「ントル」の形を用いている。現在では広島市とその周辺では「ントル」を用いているが、古くは、「ンチョル」を用いていたようである。現在でも、老人層においては、豊田郡安芸津町風早以西、安芸郡、賀茂郡、佐伯郡で用いられるものとなっている。山口県下以西の地域では「ントル」になる傾向がなお乏しいけれども、広島県下のすべての地域は、急速に「ントル」にとつて変わりつつある状況にある。当地方人の、拗音の直音化傾向という好みは、進行しつつあるように受けとられる。その中にあって、熊野町の三〇歳代以上の人々は、かなり強く「ンチョル」の形を保持しているといえるのである。

「シテヤル」「シテアゲル」という時の「テヤル」「テアゲル」を広島市を中心とする地域では「ンタル」「ンタゲル」というようになっていく。「ンチャル」「ンチャゲル」の拗音に対して、これも直音化しているものである。熊野町では、「ンチャル」「ンチャゲル」を用いている。「ンチャル」は、目下若しくは同輩に対して、その人のために何らかのことがらを授けることを表わす表現である。目上の人に対しては「シテアゲル」に由来する「ンチャゲル」が用いられる。授け態ともいえるべきものである。

I 生活誌編

○アンタカタノ ヒトニヤ アー シチャゲンサイジャガ ウチノニヤー コノ ブニユー コーチャツチ
クレンサリヤー エー。(お宅の人(お宅の御主人)には、ああしてあげなさいだが、私の八人▽には、この分を買っ
てやっつて下さればよい。 老女↓中男)

このように、「チャル」「チャゲル」は尊敬態上の差として用いられている。

「〜テオク」は、広島市及びその周辺では「〜トク」の形で用いられている。これは、すでにそのことに対応する動作・作用を行ってしまった意を表現するに用いるものである。既処置態ともいべき表現をなすものなのである。熊野町では、これを「〜チヨク」という。

○ハヨ モローチヨカンニヤー。(早くもらっっておかなければ。 中女↓少女)

以上の「〜チャル」「〜チャゲル」「〜チヨク」は、尾道市以西で用いられている形である。しかし、いづれも若年層では直音化した形を好むようになってきている。その傾向が広島市を中心とする都会化した地域では各年齢層に認められるようになってきているわけである。

この項目で取り上げたものは、いづれも助詞「テ」を介在させて構成される述部の態にかかわる表現のものである。使用度の高い表現だけに、人の耳に、特異な感じを与えやすい。そのため、一度、直音化の傾向が生じると、かなり早く直音化する。熊野町の青年層以下において、直音化した形しか用いられなくなりつつあるのも、このためであろうと考えられる。

音節添加

熊野町で、音節添加が認められるのは「ン」音の添加事象である。

イッコン(一箇) ニコン(二箇) ……ハッコン(八箇) キューコン(九箇) ジッコン(十箇) の

ように、助数詞の後に「ン」をつける。

また、打消の助動詞「ン」に接して、問いをしたてる文末詞「ノ」が位置する場合、その「ノ」は「ノン」の形をとる。

○イカン ノン。(行かないの。 少女↓々)

このほかには、特に音節添加事象として認められる強い傾向はない。

音節脱落

「ナサイ」よりも敬意の度合の低い「ナイ」は、「ナサイ」の「サ」音の脱落を指摘しうる事象である。なお、この「ナイ」は、熊野町では、ごく稀にしか用いられないものである。そのことは、

後に取り上げる「ンヤイ」が多用されているためであろうかと考えられる。次に、「イテ」「モテ」が認められる。

○イチ コー カノー。(行って来ようかねえ。 老男↓々)

○ハヨー モチエ キチエ ミー ヤー。(早く持って来て見ろよ。 中男↓中女)

これらを、「イッテ」「モッテ」の形と対応させてみると、捉音脱落の事象がうけとられる。この事象は、以上の二語に限って見られ、広島県下、四国の各地にも用いられている形である。

「ございます」の「ガンス」は、広島県特有の語詞として著名である。この語は、熊野町の老人層で、ごく稀に用いられるものとなっている。

「物を探す」というとき、「タネル」という。これは「尋ねる」に由来する語であろうか。

○ハヨ ソコラー タネチエ ミー ユチエ ユーチエデ ガンス ヨ。(早くそこらを探してみよと 八私の夫が言われますよ。 老女↓中男)

これらは、いずれも音節脱落の結果、元の形がどうであったか、にわかには、わからないほど変化したものである。

禁止表現の、次のものにも音節脱落が認められる。その変化過程は、次のようであろう。

○スナ↑スanna↑スルナ

○カンガエナ↑カンガエンナ↑カンガエルナ

「ル」の「ン」音化した形は、芸北地方に盛んである。芸南の熊野町では、上部に示す形が用いられている。

「アイ」という二重母音が、「アー」と発音されるのは、安芸地方の特色である。熊野町でも、「ナー」（ない）、「クサー」（臭い）、「サータ」（咲いた）のように発音されている。しかし

二重母音の同化

ながら、これらの二重母音の同化現象は、いずれも、和語の場合に限って認められるものようである。

「ワリ」（悪い）も、同化が認められるか。しかし、これは、「わろし」から変化した語であるため、「ウイ」連母音の同化を、にわかには指摘できない。

「エイ」を「エー」と発音するのは、中国地方の一般的傾向である。「エーゴ」（英語）のように発音している。

母音の交替

[i] ↓ [e]

母音の交替には、音節をなす母音、また子音に母音の付した音節の、どちらの場合もある。

エベス|（胡） カベ|（かび） メヤネ|（目やに） エベセー|（「いぶせし」に由来する語、おそろしい）

この現象は、かなり多く認められる。中で注目されるのは、助詞「テ」を「チ」と発音する現象である。この現象は、単に、[e]母音が[i]母音として発音されるという現象以外にも、子音の発音の問題も含まれているものである。

○イツチ キチ ホテ クーチ キタ カ。（行ってきて、そして食べて来たか。 老男↓々）

このように、「テ」助詞のほとんどを「チ」で発音する人は、少なくなった。昭和六十年で、六五歳の男性が

近隣の同年輩の女性と話しているときに、この例は得られた。しかし、この人が、筆者と話す際には、すべて「テ」を用いていた。このように、「チ」を用いる傾向は、急速に失われつつあるといつてよい。

五〇歳の男性の場合では、

○キノー アンタカタイ イッチェカラ ヨー ハナーチ ヨイチェ クレー ユーチヨイタンジャガ ノー。

(昨日あなたの家に行つてから、よく話しておいてくれといつておいたのだがねえ。 中男↓タ)

のように話している。「チェ」が一般化しているわけである。「チ」から「チェ」に移り、さらに「テ」に変わつて行くと見てよからうか。

助詞「て」を「チ」と発音する地域は、現在、九州地方に盛んである。山口県下でも、玖珂郡本郷村や岩国市北部で、用いられている。広島県下では、熊野町と、安芸郡蒲刈町向で用いられている。この分布状況からすると、古くは、安芸郡下でかなり広く用いられていた事象であると想像される。呉市では、次のような表現に限つて現在でも盛んに用いられている。

○イッチー。(行つてみよ。 青男↓タ)

これは「テミ」の熟合とも考えられるが、助詞「チ」の存在を否定できないであろう。

助詞「チ」の盛んな、大分県姫島で、

○ヨー マイチ チューチ ナー。(よく語つてといつてねえ。 老男↓中男)

のようにいうとともに、

○コシ シンジノ シチェカラ ナ。(こうして信心をしてからね。 老男)

のように「チェ」ともいうようになつてゐる。熊野町で、現在、中年層の人々に「チェ」が聞かれるのも、姫

島のそれと同一の音変化過程にあるためということができようか。熊野町の場合、「チ」は急速に失われつつある。また、「チェ」も、特定個人に、わずかに保持されているという状況である。助詞「チ」「チェ」が聞かれなくなる日も、そう遠くはなさそうである。

[i] ↓ [u]

クタブレ_レル (また、「クタブレ_レル」くたびれる)

シュミ_ル (しみる) シュム (△鼻を▽かむ)

[u] ↓ [i]

ワカイシ (若い衆) ヌシト (盗人)

[i]と[u]の交替事象は、安芸地方一般に、広く認められる。

[o] ↓ [a]

「カワ」(顔)という事象は、芸北町でも用いられている。熊野町でも、すでに老人層のものとなっている。

母音の脱落

「ナサイ」を「ンサイ」といい「ンヤイ」というときの「ン」は、[a]母音の脱落事象である。「ナニ」を「ナン」、あるいは次のような表現も、母音脱落の例の一つであろう。

○バンゲン ナッタ。(夕方になった。 中男↓々)

格助詞「ニ」が「ン」と発音されているものである。

△サ行音とハ行音▽

子音の交替

○モー イキヤー ヘン。(もう行きはしない。 中女↓々) △怒って言う▽

この「ハ」は、「セ」とも発音されるものである。ていねいの「くません」は「くまへん」、「くましよう」は

「マヒョー」である。

名詞類でも、「ヒチガツ」(七月)、「ヒチヤ」(質屋)、「ヒチリン」(七輪、かんてきのこと)など、ハ行音化している。

応答詞「そう」が「ホー」「ホ」の形をとっているのも、この一類のものである。

△ザ行音とダ行音▽

デニ(銭)、ハデ(楯架ハハゼ▽)、ジョーリ(草履)、ノフドー(なまいき者△ノフゾー▽)、イカダツタ(行かない)
かつた△イカザツタ▽)

ザ行音のダ行音化、またその逆ともうけとれる事象は、数多く認められるようである。

△バ行音とマ行音▽

ケブリ(煙)、バク(撒く)、ネブル(寝る)

ことばの抑揚のことを、アクセントという。アクセントには、抑揚の上で、文全体を特徴づけて
アクセント いる文アクセントがまず注目され、ついでその土地の単語のアクセントが注目される。

(ア) 文アクセント

熊野町の文アクセントは、安芸地方一般に広く認められる、後上がり調のものが特徴的である。これは、文の抑揚が、文表現の途中において、どのように変化していようと、文末の高音部がその文表現全体のアクセントの抑揚を特色づけるものとなっているというものである。

○ホー ユー コトガ アリマヒョー ノー。(そういうことがありましょねえ。 中男↓タ)

この文表現において、「コト」「アリマヒョー」という二か所の高音部が認められる。この二か所の高音部は、

それ以前の低音部に対して、それぞれ後上がり調を形成している。すなわち、
 いう二回の後上がり調をなしている。ところが、文末の「ノー」は、この文表現全体を、一つの後上がり調のものにまとめるものになっている。これを図示すれば、次のように示されようか。

このような文アクセントの特徴が、最も端的に表われるのは、一文表現の上に認められる場合においてである。

○コッチー カケナサンへー。(こちらにお掛なさいませ。 中女↓中男)

一文が、一つの抑揚に支配されて存立している状況がよくわかるであろう。

(イ) 語アクセント

広島市方言の語アクセントと体系上の差はない。ところが、その中であって語アクセント型の変わっているものがある。それは、次の三語である。上段に広島市、下段に熊野町の例を示してみる。

| | | |
|------|------------|------------|
| (柱) | ハシラ (ハシラガ) | ハシラ (ハシラガ) |
| (油) | アブラ (アブラガ) | アブラ (アブラガ) |
| (梯子) | ハシゴ (ハシゴガ) | ハシゴ (ハシゴガ) |

この三語は、広島市方言ではいわゆる平板型に所属する語であるが、熊野町ではいわゆる中高型に所属するものとなっている。熊野町と同一の型に所属するようになっているのが、安芸郡坂町である。坂

町でも、この三語だけが、広島市のアクセント型とは異なる語として発せられている。

坂町は、熊野町とは異なり、語の頭の部分が高まるアクセント、すなわち中くぼみ型とでもいうべき語アクセントをもっている。例を示せば、「イキガイガ(生きがいが)、トリーガイ(通りが)、タライガイ(たらひが)、コーヒーガ(コーヒーが)」のようである。ところが、熊野町には、このような中くぼみ型のアクセント型は認められな

い。前述の「柱、油、梯子」の三語の語アクセント型が坂町と同一であることは、かつて坂町の語アクセント体系が熊野町のアクセント体系と同一であり、後に現状のように中くほみ型アクセントを成立させたということを考えさせてくれる。

第三節 表現の生活

あいさつ、感動などの表現

あいさつや感動などの表現は、その土地のことばでの決まりきった表現であるといふことができる。その表現のしかたに、特別な意味をもたせているのではなく、土地人どうしのコミュニケーションが、スムーズに進められるといつてよいものである。

(ア) あいさつの表現

朝

○オハヨ ガンシタ。(お早うございます。)

「ガス」は、現在では、八〇歳以上の人々でないと使用されない。これに答えて、

○オハヨ ガシタ ノー。(お早うございます。)

のように「ガス」の形が用いられていることもある。

中年層以上であると、

○オハヨ アリマシタ。(お早うございます。)